

行動の頻度が増加することが知られている。さらに、交渉に参加した個体と参加しなかった個体の間に特定の社会関係（たとえば血縁関係）が存在している場合には、それらの個体間でも親和的交渉の頻度が増加することがいくつかの種で報告されている。本研究は、ニホンザルにおいてこのような行動がみられるかどうかを検討することを目的としておこなった。調査は志賀A1群を対象におこなった。資料は現在分析中なので結果の概略を報告する。

アドリブ・サンプリング法を用い、敵対的交渉が起こった後、交渉に参加した個体のうちの一方を60分間個体追跡し、その個体が持った社会交渉をすべて記録した。観察された社会交渉のうち近接とグルーミングを親和的交渉とし、敵対的交渉後の生起頻度と持続時間を算出した。その後、敵対的交渉をもった相手との血縁関係、攻撃の強弱の程度、攻撃者であったか被攻撃者であったか、という3つの観点から比較分析をおこなった。

その結果、敵対的交渉後の交渉に参加した個体と第三者との交渉については、敵対的交渉直後（15分以内）の親和的交渉の発生頻度や持続時間には条件間で大きな差は見られなかったが、敵対的交渉後16-60分間の親和的交渉の生起頻度には、上記の条件間で若干の差異が見られた。一方、敵対的交渉の参加個体同士の交渉については、攻撃の強弱の程度の影響はなかったが、相手個体が血縁個体である場合には交渉後15分以内に相手個体と親和的交渉を持つ傾向があった。

これらの結果は、ニホンザルにおいても敵対的交渉がその後の親和的交渉の生起に影響することを示唆している。今後さらに資料収集をおこない、今回の結果とあわせて考察する予定である。

自由：10

冷温帯林に生息するニホンザルのカロリー及び各種栄養摂取量の季節変動

中川 尚史（シオン短大・教養）

北日本の冷温帯林に生息するニホンザルは、冬期著しい食物不足に陥る。宮城県金華山島の野生ニホンザルは、晩秋にはカロリー・蛋白質とも必要量を上回っている（必要量のそれぞれ43%、16%増）のに対し、晩秋期にはともにかなり下回る（必要量のそれぞれ45%、38%）ことがすでに明

らかになっている（Nakagawa, 1989）。この結果は、秋の余剰エネルギーによる体脂肪の蓄積により冬の食物不足に対処していることを示唆している。しかしながら、こうした個体の栄養状態に関する調査は、冬だけでは不十分であり、通年の資料が集まってこそ完結したものになる。これまでニホンザルの食物アベイラビリティ及びサル栄養状態は秋・春・夏・冬の順に高いとされてきたが、これを量的に示した研究は皆無である。本研究は、すでに明らかになっている秋・冬を除いた季節のニホンザルのカロリー及び各種栄養素摂取量を明らかにし、さらに季節的・地域的な栄養摂取量の差が食物の単位重量の差に由来する摂食速度の違いによること（Nakagawa, 1989）を支持する資料を蓄積することを目的として行った。

夏期にあたる8月中旬、金華山A群に属するオトナメス1頭を終日個体追跡したところ、コゴメウツギの種子、サワフタギの葉、ガマズミの果実、ヘクソガズラの葉、ヤブマメの葉、サンショウの葉および果実などが主要食品目であった。これら6品目の栄養分析も併せて行った結果、カロリー及び蛋白質の平均含有量・摂取速度はそれぞれ以下のものであった。含有量：4.47kcal；15.12%；摂食速度：1.88kcal/分；0.0534 g/分。

これらの値を秋・冬の値と比較してみると、含有量については摂取量が要求量を十分満たしていた秋のそれと比べても遜色なく、蛋白質については葉の含有量の高さのためむしろ高かった。しかしながらどの品目も単位重量が軽く、そのため摂取速度、とくにカロリー摂取速度が、摂取量が要求量をかなり下回っていた冬のそれを若干上回る程度であった。

これらのことから、冷温帯に生息するニホンザルは、夏期も食物摂取速度の低さに由来する食物不足に陥っている可能性が高いことが推測された。

自由：11

Feeding Strategies and Reproductive Success with Special Reference to Social Status in Non-human Primates: Nutritional Constraints on Reproduction in Japanese Macaques.

SOUHAH, Aly Gaspard

High-ranking females in a troop of free-